

エコツーリズムの定義と分類に関する検証

Verification on Definitions and Categories of Ecotourism

貝柄 徹・磯 篤 喜 規

要 旨

団体旅行から個人旅行、手配旅行などで一通りの主要観光地をめぐり終えた一部のツーリストは俗に言う「秘境」へ足を踏み入れだした。このような時期ゆえマス・ツーリズムは、次の観光形態の創出という時期に来ている。通常の観光に飽きた人々や環境問題に興味ある人々が study tour, nature tour, volunteer tour, student tour などに参加するようになり、オルタナティブ・ツーリズム (alternative tourism: もう一つの観光、新たな観光) という概念が生まれ、極めてラチュードの広いエコツーリズムに発展した。しかし諸団体、諸機関によって提唱されたため、エコツーリズムの定義が曖昧なまま認知されてしまった。本稿では、エコツーリズムの概念が生まれるまでの経緯とその定義について、現状の整理を行うことを目的とした。様々な団体、機関のエコツーリズムに対する定義を明確にし、エコツアーの事例や朝日新聞に掲載された記事の分析から検証を行った。「持続可能な観光」を模索する今後の展開を検討する材料とした。

キーワード：エコツーリズム・持続可能な観光・エコツアー

1. はじめに

1980年代初頭、リサイクル、自然保護運動、地球環境や生態系の保全といった環境を重視する気運の高まりと観光形態の多様化が結合し、新たな観光旅行の形が始まり出した。団体旅行が中心のマス・ツーリズムにはじまり、個人旅行、手配旅行などで一通りの主要観光地をめぐり終えた一部のツーリストは俗に言う「秘境」へ足を踏み入れだし

た。本来、秘境への訪問は、動植物学や文化人類学などの研究者による野外調査が主であり、研究者を目的地へ案内する現地でのコーディネーターやガイドといったビジネスも極めて小規模なものであった。そういった様子がテレビ、雑誌などのマスコミ報道によって紹介され、通常の観光に飽きた人々が訪れ始めた。それに伴い現地では、コーディネーターやガイドのみならず、受け入れ機関、宿舎など様々なビジネスの拡大が迫られた。秘境を観光する目的も、通常行けない所を訪問したいという一義的なものから、自分の趣味やアイデンティティの確立といった動植物の観察などを主とするstudy tourやnature tour、植林や井戸掘削などのvolunteer tour、student tourなど百花繚乱的な様相を呈し始めた。業者が対象とする年齢・職業は、定年後の余暇を裕福に過ごす熟年層から学生まで多岐にわたる。

従来型の確立されたマス・ツーリズムの形態に揺らぎはないが、次の観光形態の創出という観点から前述のようなツアーが様々な業界・団体等で企画されるようになってきた。場合によっては、マス・ツーリズムのサブ・システムとする範疇もあり、これらのツアーの総称をエコツーリズムとする気配がある。本稿の目的は、極めてラチュードの広いエコツーリズムの概念とその定義について現状の整理を行うことで、今後の展開を検討する材料とすることにある。

2. エコツーリズム概念の経緯

(1) マス・ツーリズムからの移行

1970年代は世界各国で多くの環境問題が発生した年代で、こうした社会背景を受け、1972年にスウェーデンのストックホルムで国連人間環境会議（通称「ストックホルム会議」）が開催された。自然にやさしい観光、環境にやさしい観光、地球にやさしい観光など自然環境や野生生物の保護への動きの出発点となる。本会議は、ユネスコによる世界遺産条約¹⁾や国際自然保護連合（IUCN：International Union for Conservation of Nature and Natural Resources²⁾によるワシントン条約³⁾の誕生の契機となり、国連環境計画（UNEP：United Nations Environment Programme⁴⁾を創設し、文明観の変質をもたらした（岡本 2001、吉田 2003など）。

かような前段階を経て、1980年に国際自然保護連合（IUCN）、国連環境計画（UNEP）、世界自然保護基金（WWF⁵⁾）の3つの機関が共同で「世界環境保全戦略（WCS）」を発表した。副題は「持続可能な開発のための生物資源の保全」となっており、人類生存のための自然資源の保全の概念を公表した。一般にこの戦略が「持続可能な開発 sustainable development」の理念の提唱で、エコツーリズムの世界的展開のきっかけとされる。しかしエコツーリズム概念の登場は1980年代後半とする説（吉田 2003）もある。そのため年代について明確な断言はできないが、おおよそこの頃、マス・ツーリズムによる

多大な観光収入が得られる一方、自然地域に対する急激な開発や観光客の増加で、自然環境や地域文化が少なからず破壊され、その批判が相次いできた。そのために、マス・ツーリズムに変わる脱産業社会的価値観に沿った新たな観光（オルタナティブ・ツーリズム alternative tourism：もう一つの観光、新たな観光）が生まれてきたと考えられる。

日本では環境庁が⁶⁾1990年に「熱帯地域生態系保全に関する取り組み」の中でエコツーリズムを提唱したのが最初であり、これ以降、様々な機関、団体によって変容を遂げてきた。農林水産省は、1992年4月、イギリスの rural tourism, sustainable tourism、イタリアやスペインの agro tourism をモデルに、構造改善局長の私的諮問機関としてグリーン・ツーリズム研究会を設置した。そこでは、マス・ツーリズムから一步踏み込んだグリーン・ツーリズムを提唱し、農山漁村の活性化、都市と農山漁村の共存関係の構築、農山漁村地域における自然、文化等の交流を楽しむ滞在型の余暇活動といった取り組みと定義づけている。そして1995年4月1日に「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律」を施行している。この法律は、以下の2点からなっている。①農村滞在型余暇活動について都道府県基本計画と市町村計画を策定する。②農林漁業体験民宿の登録制度をつくり、登録標識を掲示する。そのため欧米型と区別し、「日本型グリーン・ツーリズム」として分類している（井上ほか 1996、脇田・石原 1996、吉田 2003、山崎 2004、小方 2004など）。また横山（2002）もヨーロッパのグリーン・ツーリズムは、ソフト・ツーリズムと同義語で、単なる農村観光、農業体験観光でないことを明記し、「発展途上国ならびに途上地域の自然保護と地域社会に寄与すべきエコツーリストの存在」がエコツーリズムの成立条件と言及している。

社団法人日本旅行業協会（JATA）⁸⁾は1993年に「地球にやさしい旅人宣言」を発表し、自然観察主体のエコツアーを企画し始めた。運輸省（現・国土交通省）も1995年に国内観光推進協議会エコツーリズム・ワーキンググループを設置し、モデル地域における振興方策の検討を開始した。

1998年には全国組織のエコツーリズム推進協議会（以下 JES と称す）が設立された。その後2002年に日本エコツーリズム協会⁹⁾へ改名し、2003年には NPO（特別非営利活動）法人となった。JES はエコツーリズムを「地域の自然や文化への理解を深め、そのよりより保全とゆとりある活用により、みずみずしい観光と産業を持続的に発展させる運動」（季刊 ECO ツーリズムの裏表紙）と捉え、後述する定義を提唱した。このような時運を受けて、環境省が、2003年11月に「エコツーリズム推進会議」（議長：小池環境大臣）を設置した。本会議は、「環境保全を实践する活動、農林業体験を通じた自然への理解を深める活動なども含めて捉え、普及定着を目指す」（環境省のウェブサイト）環境教育の推進を目的としている。日本では1990年代後半に明確な定義がないまま、エコツーリズムという語が諸機関によって提唱され、認知されてきた。

(2) 近年の研究

従来、観光政策や交通面からエコツーリズムの概念や課題を論じたもの（武田 1994、千葉 2005など）が多かったが、2001年、地理科学学会の秋季学術大会で「エコツーリズムを考える—自然保護と地域経済の両立をめぐる諸問題—」のシンポジウムが開催された（浅野・フंक 2002）。「持続可能な開発」という基本的理念の整理がフंक（2002）によって、またヨーロッパのグリーン・ツーリズムとドイツのエコツーリズムの事例が横山（2002）に紹介されている。

2002年は、国連が「国際エコツーリズム年と国際山岳年」として焦点をあて、8月に南アフリカ共和国のヨハネスブルクで「環境サミット」を開催した。2つの国際年のいきさつ、取り組み、そして世界の山岳地域に山積する課題について渡辺（2002）が概観を論じている。また北海道のエコツーリズム実践のためのガイドラインについて地理学の立場から小野（2002）が論じた。

このような時局ゆえ、岩波書店の月刊科学も「エコツーリズムの展望—楽園への道」と題する特集を2002年に組んでいる。山田（2002）は、生態資源の面からエコツーリズムの将来を模索し、北尾（2002）は、都市と農村との新たな結びつきに期待している。石森（2002）は、地域主導の「自律的観光」の重要性を説き、下村（2002）は、社会システムとしてのエコツアーのモデル化を論じている。意外な側面では松林（2002）が、疾病面から生態系を論じている。

政治社会的な側面から山下（2002）はマレーシアのサバ州を、速見（2002）はタイの山岳少数民族を事例に論じている。

本特集では、エコツアーの実践事例の紹介も多い。大野（2002）はエコツアーガイドについて、中井（2002）はエコツアーのガイドラインについて、奥田（2002）は日本のエコツアーの概要について簡単に紹介している。また鈴木（2002）はインドネシア、マレーシアの植物観察の観点から、安間（2002）はボルネオ島の動物観察の観点から新しいエコツーリズムを説いている。

最後に国内のエコツアーの事例研究をあげておく。釧路湿原（幸丸 1992）、白神山地（牧田 2002a、2002b、牧田ほか2002）、白山（小宮山 2002）、小笠原諸島（中井 2002、可知 2002）、宮島（浅野 2002）、屋久島（野間 2002）などの著名なエコツアー地が随分と紹介されてきた。

(3) エコツーリズムの定義

前述したように、様々な立場、機関、団体からの切り口があり、エコツーリズムの定義については、まだ明確なものはない。小林（2002a）は、科学的環境保護分野の団体、国際援助機関、開発途上国、旅行業界の4団体・機関による立場の違いが定義を多様に

した理由としている。しかし観光学や環境論の学識経験者・研究者による定義もこれに加えなければならず、より複雑な様相を呈する。ここでは代表的な定義例をいくつか紹介する。

エコツーリズムという語は1983年にメキシコの建築家ヘクター・セバロス・ラスクラインが初めて使ったとされる。彼自身による造語で、当初は冒険旅行的な範疇であったが、1988年、1993年に改めて定義し直された。1993年の定義では、「風景や野生植物、動物および見いだされた現存の文化創造物（過去および現在のもの）を特別に研究、鑑賞、享受する目的で比較的荒らされていない、もしくは汚染されていない地域を旅すること」としている。

また現在、最も標準的なものは、エリザベス・ブー（Boo 1991）が提唱した「保護地域のための資金を作りだし、地域社会の雇用を創出し、環境教育を提供することにより、自然保護に貢献する自然志向型の観光である。」とされる。

一方、自然保護関連では、国際自然保護連合（IUCN）の定義が代表的で1992年に「エコツーリズムは、比較的乱されていない自然地域の中で、景観や野生の動植物を観察し、研究し、楽しみ、また、その地域に存在する過去と現在の文化的特色を対象とする特別の目的をもった旅を含む観光である。」としている。マレーシア・サバ州のガイドラインは、この国際自然保護連合の定義に即している。

国際エコツーリズム協会（TIES：The International Ecotourism Society¹⁰⁾）は、より明確かつ単純に「環境の保全がなされ、地域住民の福利に貢献している自然の地域へ、責任をもって旅すること」とし、オーストラリアエコツーリズム協会（EAA¹¹⁾も「環境と文化を理解し、感謝と保全に育み、自然地域での体験を主目的とする生態系に配慮した旅」と同様である。

一方、日本自然保護協会（NACS-J¹²⁾は「旅行者が、生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう、環境に配慮した施設および環境教育が提供され、地域の自然と文化の保護・地域経済に貢献することを目的とした旅行形態」としている。また日本エコツーリズム協会（JES）も同様といえる「①自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光の成立、②地域固有資源の保護・保全、③地域経済への波及効果の実現」を示している。

旅行業界では、多くの国で観光に携わっている機関が定義を示している。米国旅行業者協会（ASTA：American Society of Travel Agents¹³⁾）の定義は、「エコツーリズムは、環境との調和を重視した旅行、すなわち野生の自然そのものや環境を破壊せずに自然や文化を楽しむことを目的としている。」としているが、日本では、その定義はより商業的といえる。社団法人日本旅行業協会（JATA）は、以下6つの要素の内、一つで入っておればエコツーリズムと認識して良いことになっている。①旅行者の教育、②絶滅に

瀕した動植物の保護、③文化・歴史的環境保全への貢献、④専門ガイドの利用、⑤地元社会の利益、⑥ゴミの削減と最小限のインパクト

以上の定義からキーワード「自然環境の保全」、「地域社会への利益還元」、「責任ある旅」、に大別し、分類を試みた(表1)。試行錯誤を経ながら、時代と地域にあわせて変容してきたが、いわゆる自然保護団体は、概して明確な定義を有しており、旅行業界などは、柔軟な対応をしていることが明白となった。

表1 エコツーリズムの定義要素

	自然環境の保全	利益還元	責任ある旅
学識経験者・研究者			
H. C. Lascurain	○		
E. Boo	○	○	
自然保護関連			
国際自然保護連合(IUCN)	○		
国際エコツーリズム協会(TIES)	○	○	○
オーストラリアエコツーリズム協会(EAA)	○		○
日本自然保護協会(NACS-J)	○	○	○
日本エコツーリズム協会(JES)	○	○	○
旅行業界			
米国旅行業者協会(ASTA)			○
日本旅行業協会(JATA)	○*	○*	○*

*1点でも適用されておればよい。

3. 朝日新聞連載記事から見たエコツーリズム

(1) 概略と世界の分析

朝日新聞は2003年10月2日から2004年10月14日まで、木曜日の夕刊に全49回から構成される連載記事「エコツーリズムのススメ」を特集した。その記事の内容について、対象国、対象地域、3段階のテーマ、エコツアー紹介の有無について分類を行った(表2)。筆者は石森秀三氏(国立民族学博物館教授)、海津ゆりえ氏(資源デザイン研究所代表)、真板昭夫氏(京都嵯峨芸術大学教授)の3名で、49回の全連載の内、石森氏と海津氏がそれぞれ18回、真板氏が13回を担当している(表3)。限定された著者、スペース、期間ゆえ、この情報のみでエコツーリズムの概要を議論する危険性は承知している。しかし新聞という一般人向けの媒体であることから一連の方向性をとらえる材料と考えた。

対象国は49回の内、日本が21回、以下ニュージーランドの5回、エクアドル、オーストラリアの4回、ブラジル、マレーシアの3回、コスタリカ、中国、ボスニア・ヘルツェゴビナの2回、フィジー、ナウル、フランスの1回と各人の専門分野や訪問先など

の違いが反映し、多岐にわたる（表4）。対象国という意味では日本が最多（石森氏3回、海津氏10回、真板氏8回）とはなるが、日本のエコツアーの紹介が全部で12回というのは、相対的に海外に比べて対象地域が少ないことを示している。

日本の次に多く書かれたニュージーランドは、小さい国ながら日本と同じ湿潤変動帯に位置するため、山岳地帯、降雨林帯、氷河、フィヨルド、活火山など種々の地形に富んでいる。しかし本記事では、石森氏しか取り上げておらず、大半がオタゴ半島の動物保護区（ペンギンとアホウドリ）についてであった。概して自然景観よりも動植物に主点を置くのは、マスコミの報道同様、一般に認識されやすいためであろう。

エクアドルは中米において、コスタリカと並ぶエコツーリズム推進国である。しかし記事の対象地域は太平洋上のガラパゴス諸島のみであった（伊藤 2002bも参照）。チャールズ・ダーウィンがビーグル号航海（1831～1836年）で「種の起源」の基本理念である進化論のヒントを得た場所で、世界遺産の第1号でもある。ゆえに動植物のみのテーマではなく、国家による保全体制の記事が主となっている。

オーストラリアは、豊富な自然資源とそれを保全してゆく管理体制が明確なもっとも進んだエコツーリズム推進国の一つでもある。小林（2002a、2002b）・スー・ビートン（2002）に、詳細な具体事例やガイドラインの紹介がある。日本以外では唯一、三氏ともこの国をあげている。地域（カカドゥ国立公園・フレーザー島・モンレポスビーチ）も異なり、テーマも分散している。

以下、ブラジル、マレーシア、コスタリカ、中国、ボスニア・ヘルツェゴビナ、フィジー、ナウル、フランスはニュージーランド同様、一人の著者による記事であった。一部を簡単に紹介しておく。

ブラジルは、海外エコツーリストに一番人気であるアマゾン地帯がある。また、世界一の規模を誇るパンタナール湿原には、南米の野生生物が集中して生息していることからマスコミ他の特集がよく組まれている（仁平 2003など）。

マレーシアは比較的早い段階で、マレーシア旅行業界（MATTA : Malaysian Association of Tour and Travel Agents¹⁴⁾と環境団体の協力によって、国主導のエコツーリズム政策が行なわれてきた。ボルネオ島でのリバークルーズによるオラウータンなどの野生生物に出会えるツアーは、エコツーリストのみならず、近年では距離的に近いこともあり日本からのマス・ツーリズムの対象地ともなっている。

コスタリカは国土の約25%が環境保全地域に指定されており、地球上の全動植物の約5%が生息していると言われている。そのため「エコツーリズムのメッカ」と呼ばれるほどエコツーリズムが発展し、国もエコツーリズムによる経済効果に期待している。内村（1992）は詳細な事例を、池田（2002）は実践論を簡単にあげている。数多くある保護地域の中でも、モンテベルデ・クラウドフォレスト自然保護区では、ケツァールや

表2 朝日新聞「エコツーリズムのススメ」の分類表(日付順)

No.	掲載年月日	国	地域	著者	大テーマ	中テーマ	小テーマ	エコツアー	生物系
1	2003. 10. 02	日本	西表島	石森秀三	動植物	ホテル	オオシママドボタル	○	○
2	2003. 10. 09	日本	磐梯山	石森秀三	自然景観	湿原	水鳥・水生生物	○	○
3	2003. 10. 16	日本	白神山地	海津ゆりえ	動植物	ブナ			
4	2003. 10. 23	日本	徳島県美郷村	海津ゆりえ	建築物	民家	ホテル	○	○
5	2003. 10. 30	日本	高知県大方町	石森秀三	自然景観	砂浜美術館	ニタリクジラ		○
6	2003. 11. 06	コスタリカ	コスタリカ	石森秀三	保全	国立公園	マヌエル・アントニオ国立公園		○
7	2003. 11. 13	コスタリカ	コスタリカ	石森秀三	動植物	国立公園・生物多様性	ブラウリオ・カリリーヨ国立公園	○	○
8	2003. 11. 20	フィジー	アンバザ村	海津ゆりえ	生活	村の生活		○	○
9	2003. 11. 27	エクアドル	ガラパゴス諸島	海津ゆりえ	動植物	野生動物	アホウドリ・グンカンドリ	○	○
10	2003. 12. 04	エクアドル	ガラパゴス諸島	海津ゆりえ	保全	管理型観光		○	
11	2003. 12. 11	エクアドル	ガラパゴス諸島	真板昭夫	保全	資源管理	ゾウガメ		○
12	2003. 12. 18	日本	南大東島	真板昭夫	自然景観	島まるごと館	ダイトウオオコウモリ	○	○
13	2003. 12. 25	日本	小笠原諸島	海津ゆりえ	保全	外来種駆除		○	○
14	2004. 01. 08	日本	岩手県二戸市	真板昭夫	動植物	ホテル	ヒメボタル	○	○
15	2004. 01. 15	日本	阿蘇カルデラ	海津ゆりえ	自然景観	牧草地		○	○
16	2004. 01. 22	日本	天売島	真板昭夫	動植物	海鳥	ウトウ	○	○
17	2004. 01. 29	日本	御蔵島	海津ゆりえ	動植物	イルカ		○	○
18	2004. 02. 05	日本	京都・美山町・芦生	真板昭夫	動植物	動物		○	○
19	2004. 02. 12	ブラジル	アマゾン川流域	海津ゆりえ	生活	動物	ナマケモノ		○
20	2004. 02. 19	ブラジル	パンタナル湿原	海津ゆりえ	動植物	水生生物	メガネカイマン(ワニ)・カピバラ(ネズミ)		○
21	2004. 02. 26	ブラジル	パンタナル湿原	海津ゆりえ	動植物	鳥	ズグロハゲコウ	○	○
22	2004. 03. 04	マレーシア	ボルネオ島	真板昭夫	動植物	動物	リパークルーズ	○	○
23	2004. 03. 11	マレーシア	ボルネオ島	真板昭夫	生活	宿泊体験	スローな生活		○
24	2004. 03. 18	マレーシア	ボルネオ島	真板昭夫	生活	宿泊体験	結婚式		○
25	2004. 03. 25	日本	秋田・岩手県境・和賀山塊	真板昭夫	動植物	自然林	ミズナラ・ブナ		○
26	2004. 04. 01	日本	徳島県上勝町	海津ゆりえ	動植物	野草			○
27	2004. 04. 08	日本	奥多摩	真板昭夫	動植物	巨木・キツネ		○	○
28	2004. 04. 15	日本	御蔵島	海津ゆりえ	動植物	巨木		○	○
29	2004. 04. 22	ナウル共和国	ナウル島	石森秀三	生活	島民の生活変化(マイナスイメージ)	アホウドリ		○
30	2004. 05. 06	オーストラリア	カカドゥ国立公園	石森秀三	保全	国立公園	環境教育・観光振興	○	
31	2004. 05. 13	オーストラリア	カカドゥ国立公園	石森秀三	建築物	岩壁画			
32	2004. 05. 20	オーストラリア	フレザー島	海津ゆりえ	保全	国立公園			
33	2004. 05. 27	オーストラリア	モンレポスビーチ	真板昭夫	動植物	ウミガメ		○	○
34	2004. 06. 03	ニュージーランド	オタゴ半島	石森秀三	動植物	ペンギン	生態学		○
35	2004. 06. 10	ニュージーランド	オタゴ半島	石森秀三	動植物	ペンギン	野生動物の保護		○
36	2004. 06. 17	ニュージーランド	オタゴ半島	石森秀三	動植物	アホウドリ	海鳥		○
37	2004. 06. 24	ニュージーランド	オタゴ半島	石森秀三	動植物	アホウドリ	海鳥		○
38	2004. 07. 01	ニュージーランド	クライストチャーチ	石森秀三	生活	宿泊体験	ガーデニング		○
39	2004. 07. 08	日本	軽井沢	海津ゆりえ	動植物	野生生物		○	○
40	2004. 07. 15	日本	東京都松原村	真板昭夫	生活	生活の知恵	オヤマボクチ(アザミ)・ネンネンボウ餅		
41	2004. 07. 22	日本	徳島県上勝町	海津ゆりえ	生活	阿波晩茶			
42	2004. 07. 29	日本	岩手県二戸市	真板昭夫	生活	地域の「宝」			
43	2004. 08. 19	フランス	フルミ・トレロン	石森秀三	建築物	地域博物館(エコミュゼ)	地域博物館		
44	2004. 09. 02	中国	白華村	石森秀三	生活	宿泊体験		○	
45	2004. 09. 09	中国	雲南省・麗江	石森秀三	生活	アーバンエコツーリズム			
46	2004. 09. 16	日本	西表島	海津ゆりえ	生活	祭	旧盆行事「ソールアンガマー」		
47	2004. 09. 30	エクアドル	ガラパゴス諸島	海津ゆりえ	保全	希少動物の保護	ガラパゴスゾウガメ		○
48	2004. 10. 07	ボスニア・ヘルツェゴビナ	サラエボ	石森秀三	建築物	建築物			
49	2004. 10. 14	ボスニア・ヘルツェゴビナ	ブリヴァ川	石森秀三	自然景観	鍾乳洞	宿泊体験	○	

表3 朝日新聞「エコツーリズムのススメ」の分類表(著者別)

No.	著者	国	地域	掲載年月日	大テーマ
1	石森秀三	日本	西表島	2003. 10. 02	動植物
2	石森秀三	日本	磐梯山	2003. 10. 09	自然景観
3	石森秀三	日本	高知県大方町	2003. 10. 30	自然景観
4	石森秀三	コスタリカ	コスタリカ	2003. 11. 06	保全
5	石森秀三	コスタリカ	コスタリカ	2003. 11. 13	動植物
6	石森秀三	ナウル共和国	ナウル島	2004. 04. 22	生活
7	石森秀三	オーストラリア	カカドゥ国立公園	2004. 05. 06	保全
8	石森秀三	オーストラリア	カカドゥ国立公園	2004. 05. 13	建築物
9	石森秀三	ニュージーランド	オタゴ半島	2004. 06. 03	動植物
10	石森秀三	ニュージーランド	オタゴ半島	2004. 06. 10	動植物
11	石森秀三	ニュージーランド	オタゴ半島	2004. 06. 17	動植物
12	石森秀三	ニュージーランド	オタゴ半島	2004. 06. 24	動植物
13	石森秀三	ニュージーランド	クライストチャーチ	2004. 07. 01	生活
14	石森秀三	フランス	フルミ・トレロン	2004. 08. 19	建築物
15	石森秀三	中国	白華村	2004. 09. 02	生活
16	石森秀三	中国	雲南省・麗江	2004. 09. 09	生活
17	石森秀三	ボスニア・ヘルツェゴビナ	サラエボ	2004. 10. 07	建築物
18	石森秀三	ボスニア・ヘルツェゴビナ	プリヴァ川	2004. 10. 14	自然景観
1	海津ゆりえ	日本	白神山地	2003. 10. 16	動植物
2	海津ゆりえ	日本	徳島県美郷村	2003. 10. 23	建築物
3	海津ゆりえ	フィジー	アンバザ村	2003. 11. 20	生活
4	海津ゆりえ	エクアドル	ガラパゴス諸島	2003. 11. 27	動植物
5	海津ゆりえ	エクアドル	ガラパゴス諸島	2003. 12. 04	保全
6	海津ゆりえ	日本	小笠原諸島	2003. 12. 25	保全
7	海津ゆりえ	日本	阿蘇カルデラ	2004. 01. 15	自然景観
8	海津ゆりえ	日本	御蔵島	2004. 01. 29	動植物
9	海津ゆりえ	ブラジル	アマゾン川流域	2004. 02. 12	生活
10	海津ゆりえ	ブラジル	パンタナール湿原	2004. 02. 19	動植物
11	海津ゆりえ	ブラジル	パンタナール湿原	2004. 02. 26	動植物
12	海津ゆりえ	日本	徳島県上勝町	2004. 04. 01	動植物
13	海津ゆりえ	日本	御蔵島	2004. 04. 15	動植物
14	海津ゆりえ	オーストラリア	フレーザー島	2004. 05. 20	保全
15	海津ゆりえ	日本	軽井沢	2004. 07. 08	動植物
16	海津ゆりえ	日本	徳島県上勝町	2004. 07. 22	生活
17	海津ゆりえ	日本	西表島	2004. 09. 16	生活
18	海津ゆりえ	エクアドル	ガラパゴス諸島	2004. 09. 30	保全
1	真板昭夫	エクアドル	ガラパゴス諸島	2003. 12. 11	保全
2	真板昭夫	日本	南大東島	2003. 12. 18	自然景観
3	真板昭夫	日本	岩手県二戸市	2004. 01. 08	動植物
4	真板昭夫	日本	天売島	2004. 01. 22	動植物
5	真板昭夫	日本	京都・美山町・芦生	2004. 02. 05	動植物
6	真板昭夫	マレーシア	ボルネオ島	2004. 03. 04	動植物
7	真板昭夫	マレーシア	ボルネオ島	2004. 03. 11	生活
8	真板昭夫	マレーシア	ボルネオ島	2004. 03. 18	生活
9	真板昭夫	日本	秋田・岩手県境・和賀山塊	2004. 03. 25	動植物
10	真板昭夫	日本	奥多摩	2004. 04. 08	動植物
11	真板昭夫	オーストラリア	モンレポスピーチ	2004. 05. 27	動植物
12	真板昭夫	日本	東京都桧原村	2004. 07. 15	生活
13	真板昭夫	日本	岩手県二戸市	2004. 07. 29	生活

表4 朝日新聞「エコツーリズムのススメ」の分類表(国別)

No.	国	地域	著者	掲載年月日	大テーマ
1	日本	西表島	石森秀三	2003. 10. 02	動植物
2	日本	磐梯山	石森秀三	2003. 10. 09	自然景観
3	日本	白神山地	海津ゆりえ	2003. 10. 16	動植物
4	日本	徳島県美郷村	海津ゆりえ	2003. 10. 23	建築物
5	日本	高知県大方町	石森秀三	2003. 10. 30	自然景観
6	日本	南大東島	真板昭夫	2003. 12. 18	自然景観
7	日本	小笠原諸島	海津ゆりえ	2003. 12. 25	保全
8	日本	岩手県二戸市	真板昭夫	2004. 01. 08	動植物
9	日本	阿蘇カルデラ	海津ゆりえ	2004. 01. 15	自然景観
10	日本	天売島	真板昭夫	2004. 01. 22	動植物
11	日本	御蔵島	海津ゆりえ	2004. 01. 29	動植物
12	日本	京都・美山町・芦生	真板昭夫	2004. 02. 05	動植物
13	日本	秋田・岩手県境・和賀山塊	真板昭夫	2004. 03. 25	動植物
14	日本	徳島県上勝町	海津ゆりえ	2004. 04. 01	動植物
15	日本	奥多摩	真板昭夫	2004. 04. 08	動植物
16	日本	御蔵島	海津ゆりえ	2004. 04. 15	動植物
17	日本	軽井沢	海津ゆりえ	2004. 07. 08	動植物
18	日本	東京都松原村	真板昭夫	2004. 07. 15	生活
19	日本	徳島県上勝町	海津ゆりえ	2004. 07. 22	生活
20	日本	岩手県二戸市	真板昭夫	2004. 07. 29	生活
21	日本	西表島	海津ゆりえ	2004. 09. 16	生活
1	ニュージーランド	オタゴ半島	石森秀三	2004. 06. 03	動植物
2	ニュージーランド	オタゴ半島	石森秀三	2004. 06. 10	動植物
3	ニュージーランド	オタゴ半島	石森秀三	2004. 06. 17	動植物
4	ニュージーランド	オタゴ半島	石森秀三	2004. 06. 24	動植物
5	ニュージーランド	クライストチャーチ	石森秀三	2004. 07. 01	生活
1	エクアドル	ガラパゴス諸島	海津ゆりえ	2003. 11. 27	動植物
2	エクアドル	ガラパゴス諸島	海津ゆりえ	2003. 12. 04	保全
3	エクアドル	ガラパゴス諸島	真板昭夫	2003. 12. 11	保全
4	エクアドル	ガラパゴス諸島	海津ゆりえ	2004. 09. 30	保全
1	オーストラリア	カカドゥ国立公園	石森秀三	2004. 05. 06	保全
2	オーストラリア	カカドゥ国立公園	石森秀三	2004. 05. 13	建築物
3	オーストラリア	フレーザー島	海津ゆりえ	2004. 05. 20	保全
4	オーストラリア	モンレポスピーチ	真板昭夫	2004. 05. 27	動植物
1	ブラジル	アマゾン川流域	海津ゆりえ	2004. 02. 12	生活
2	ブラジル	パンタナール湿原	海津ゆりえ	2004. 02. 19	動植物
3	ブラジル	パンタナール湿原	海津ゆりえ	2004. 02. 26	動植物
1	マレーシア	ボルネオ島	真板昭夫	2004. 03. 04	動植物
2	マレーシア	ボルネオ島	真板昭夫	2004. 03. 11	生活
3	マレーシア	ボルネオ島	真板昭夫	2004. 03. 18	生活
1	コスタリカ	コスタリカ	石森秀三	2003. 11. 06	保全
2	コスタリカ	コスタリカ	石森秀三	2003. 11. 13	動植物
1	中国	白華村	石森秀三	2004. 09. 02	生活
2	中国	雲南省・麗江	石森秀三	2004. 09. 09	生活
1	ボスニア・ヘルツェゴビナ	サラエボ	石森秀三	2004. 10. 07	建築物
2	ボスニア・ヘルツェゴビナ	プリヴァ川	石森秀三	2004. 10. 14	自然景観
1	フィジー	アンバザ村	海津ゆりえ	2003. 11. 20	生活
1	ナウル共和国	ナウル島	石森秀三	2004. 04. 22	生活
1	フランス	フルミ・トレロン	石森秀三	2004. 08. 19	建築物

ひげ鳥などを観賞するバードウォッチングのエコツアーがあり、この保護区を訪れる観光客は年間約5万人、観光収入は約60万ドル（井上・須田, 2002）で、近年人気が高い。

以上のように記事ではいわゆるエコツーリズムの定番国をあげており、大きな異論はないが、環境先進国として世界をリードしているドイツを取り上げていない。ドイツの観光政策面ほかは、淡野（2004）、今泉（2002）に詳しい。環境資源を鑑賞するエコツアーだけではなく、「環境都市視察」という交通、都市計画、エネルギー、廃棄物、自然保護など、環境を重視した改革政策を行った都市を見て回るエコツアーを確立している。1992年に行われた第1回ドイツ環境コンテストで優勝し、ドイツにおける環境都市のモデルとなったフライブルクなどがその典型といえる。また近年ではヨーロッパ鉄鉱産業の中心地であったルール地方において、未来に残すべき「産業遺産」として炭坑や工場跡地の保全に着手し始めた（Nordrhein-Westfalen Tourismus¹⁵⁾）。新しいパラダイムの創出をするべく文化都市としての確立を模索しており、日本の進むべき方向性の一助になる可能性がある。

(2) 日本の分析

日本について書かれた記事21回を更に地方ごとに分類した（表5）。一番多いのが東北と関東の5回、次に四国の4回、続いて沖縄の3回、九州、近畿、中部、北海道が1回ずつとなっている。みちのく（東北）は、歴史文化のふる里と言われるゆえの結果であろう。関東の5回はすべて東京都ではあるが、伊豆・小笠原諸島などの離島が目立つ。総数の1/3の回数を占める7回が離島を扱っており、エコツーリズムの根強い人気を示している。近年の沖縄ブームを考えると、西表島と南大東島のみで紹介は少々心許ない感がある。

鹿児島県の離島と沖縄県をあわせた南西諸島という範疇では、動植物はもちろんのこと、サンゴ礁、マングローブなどの自然景観、スローライフ、食文化、長寿県など様々なキーワードをあげることができ、日本のエコツーリズムの模式地ともなりうる可能性を有している。

一見、遠方と思える南西諸島ではあるが、北琉球に位置する奄美大島、中琉球の沖縄本島、南琉球（八重山）の石垣島をそれぞれハブ空港とすれば、本土からのアクセスは悪くない。温泉を中心とする東北地方が一部のマス・ツーリズムからの脱却をはかろうとする試みは理解できる。しかしこうしたパラダイムシフトは、アクセスの観点からも多少の時間が必要かも知れない。

(3) 総括

エコツーリズムの概念が理解できても実例を見るという意味では、エコツアーを体験

表5 朝日新聞「エコツーリズムのススメ」分類表（日本の地方別）

No.	地方	地域	離島	エコツアー	大テーマ	掲載年月日	著者
1	北海道	天売島	○	○	動植物	2004. 01. 22	真板昭夫
2	東北	磐梯山		○	自然景観	2003. 10. 09	石森秀三
3	東北	白神山地			動植物	2003. 10. 16	海津ゆりえ
4	東北	岩手県二戸市		○	動植物	2004. 01. 08	真板昭夫
5	東北	秋田・岩手県境・和賀山塊			動植物	2004. 03. 25	真板昭夫
6	東北	岩手県二戸市			生活	2004. 07. 29	真板昭夫
7	中部	軽井沢		○	動植物	2004. 07. 08	海津ゆりえ
8	関東	小笠原諸島	○	○	保全	2003. 12. 25	海津ゆりえ
9	関東	御蔵島	○		動植物	2004. 01. 29	海津ゆりえ
10	関東	奥多摩		○	動植物	2004. 04. 08	真板昭夫
11	関東	御蔵島	○	○	動植物	2004. 04. 15	海津ゆりえ
12	関東	東京都桧原村			生活	2004. 07. 15	真板昭夫
13	近畿	京都・美山町・芦生		○	動植物	2004. 02. 05	真板昭夫
14	四国	徳島県美郷村		○	建築物	2003. 10. 23	海津ゆりえ
15	四国	高知県大方町			自然景観	2003. 10. 30	石森秀三
16	四国	徳島県上勝町		○	動植物	2004. 04. 01	海津ゆりえ
17	四国	徳島県上勝町			生活	2004. 07. 22	海津ゆりえ
18	九州	阿蘇カルデラ			自然景観	2004. 01. 15	海津ゆりえ
19	沖縄	西表島	○	○	動植物	2003. 10. 02	石森秀三
20	沖縄	南大東島	○	○	自然景観	2003. 12. 18	真板昭夫
21	沖縄	西表島	○		生活	2004. 09. 16	海津ゆりえ

することが手早い方法といえる。エコツアーの体験談が49回の内、26回（表2）（日本は21回中、12回：表5参照）を占めることがそれを支持している。また記事全体で多少なりとも生物系を扱っているものは49回中、26回（表2）を占める（エコツアー体験に関する記事26回中、19回）。一般に「エコツーリズム＝環境」という図式は明白ではあるが、「環境＝自然景観」ではなく、「環境＝動物」のイメージが先行している。動物を環境破壊や環境保全のプロパガンダのツールとする事が多い。1991年、湾岸戦争時の重油にまみれた水鳥の映像などはその好例であろう。

記事を5つの大テーマ（動植物・生活・保全・自然景観・建築物）に分けると動植物21回、生活12回、保全7回、自然景観5回、建築物4回となった（表2）。これからも動植物の根強い、明確な人気を読みとることができる。しかし動植物の次に生活が多い。保全・自然景観・建築物に関する記事の数は筆者によってばらつきがあるのに対して、生活に関する記事の数は三氏とも同数である。また記事の数の多さだけを見ても、動植物の次に三氏とも多く、動植物ほど明確なアピール度はないが、エコツーリズムにおける地域の生活・文化に触れることの重要性を見て取れる。

この記事から三氏の考えるエコツーリズムをとらえてみたい(表3)。石森氏は他の二氏より自然景観・建築物に関する記事が多い。ここで言う自然景観とは主に高原や鍾乳洞、建築物とは博物館や美術館であるが、これらから石森氏エコツーリズムの教育面をととても重要と考えているのではないかと思われる。海津氏は保全の記事が多いことから、エコツーリズムにおいて自然環境の保護に重要性をおいている。真板氏に関しては、他の二氏より記事数が少ないが、動植物・生活に関する記事の数が変わらないことから、三氏の中で最もエコツーリズムの定義を自然環境関係にあると考えているのではないだろうか。

4. おわりに

エコツーリズムのブームとともに現在「持続可能な観光」の模索が試みられている。しかし、利害がからんでくる関係上、エコツーリズムのすべてが、持続可能な観光に結びついているとは言えない現状が存在する。マス・ツーリズムとは異なり、旅費の単価レベルが高いこともその原因となっている。

伊藤(1991)は、エコツアーを整備する側の要件を4つあげている。①魅力的な自然と生物の存在、②その地の調査研究が継続していること、③調査研究の成果が自然保護の中に生かせる制度・機構が確立していること、④ナチュラリスト・ガイドを制度的に組み込むこと。この要件の確認をすることで受け入れ側の受容能力を判断することができる。

しかし短期の滞在では見えない様々なアイロニーが生じている例もある。山下(2002)は、マレーシアのサバ州において、油ヤシのプランテーションによる森林伐採の結果、一部の地域に野生動物が追い込まれたという結果的な「聖域」の確立や欧米裕福層(元の支配者層)の来訪は単なるノスタルジアにすぎない点、外部資本による宿舎の問題の事例を紹介している。またエコツーリズム人気によるエコツアー客の増大は、地域の観光客受容能力の限界やテロや身代金目当ての誘拐などの問題をも孕んでいる。

筆者も1992年と1998年のインドネシア・バリ島海岸の調査時に、整備された美しい水田の破壊を目撃した。「二酸化炭素削減のためのマングローブ植林」という大儀面分で訪れるボランティア学生のために事前に植林場を設けるというものであった。水耕栽培はバリ島の基盤でもあり、宗教と儀礼を重んじ、先祖伝来の水田を維持・保全することが美德とされる地においてかような変貌はいかがなものかと感じた。

Ecozy. com「エコツーリズムと持続可能な観光」¹⁶⁾では、観光による好ましくない影響と好ましい影響をあげている(表6)。好ましくない影響を皆無にすることは不可能であるが、如何に軽減させ、好ましい影響との調和を育むことが肝要であろう。

筆者らは浅学にして詳細なエコツアーの状況を知るわけではないが、旅行業者や自然

表6 観光がもたらす影響

	好ましくない影響	好ましい影響
自然	ごみ・し尿問題 交通問題 ¹⁾ 生態系に与える問題 水質汚染 エネルギー問題（電気・水） 人為的な弊害 ²⁾	環境問題への理解 インフラの整備
社会文化	異なる価値感による住民の変化 ³⁾ 治安の悪化 疫病 不平等感 インフレ プライバシー侵害	異文化理解 雇用の創出 生活水準の向上 社会的弱者の地位向上 ⁴⁾ アイデンティティの復興・確認

ecozy.com (<http://ecozy.fc2web.com>) より筆者改変

- 1) 道路開通に伴う森林伐採・渋滞・排ガス問題など
2) タバコの火による火事・土産にする希少動物の乱獲など
3) 宗教・タブーの違いによるもの
4) 女性や老人などによる現金収入の道

保護団体等の企画するエコツアーの中には、まだまだ nature tour や study tour の域を出ないものが少なくない。エコツーリズムの概念は、ツアーを企画する営利・非営利団体だけのものではなく、受容側では保護・保全地域の住民はもとより、その地域を有する国民すべてが連携している。オーストラリアやエクアドルの事例を考えるに国民一人一人の自然保護意識の高揚が大きな体系を形成すると考える。

本稿は、共著者である磯寫喜規氏（株式会社ユーストア）による2003年度の地理学演習IIのレポートおよび大手前大学人文科学部史学科に提出した2004年度卒業論文の作成時に収集した参考資料を基に主に貝柄が作成した。しかし目的や問題点などの骨子部分に関しては磯寫氏のオリジナリティが反映している。ただ時間的制限の基で収集した文献には遺漏があろう。本稿では、企画側、エコツーリズムの受容側を主に議論し、参加者側の議論を十分にしていない。文献の遺漏についてご容赦願うと同時にこれらの点は今後の課題としたい。

注釈と参考ウェブサイト

- 1) 「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」1972年11月16日の第17回ユネスコ総会で採択。 <http://www.unesco.jp>
2) 1948年に設立された世界最大の自然保護機関。 <http://www.iucn.jp>
3) 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」1973年3月3日にワシントンで採択。 <http://www.mofa.go.jp>

- 4) <http://www.unep.org>
- 5) 世界最大の自然保護の民間団体 (NGO)。 <http://www.wwf.org>
- 6) <http://www.env.go.jp>
- 7) <http://www.maff.go.jp>
- 8) <http://www.jata-net.or.jp>
- 9) <http://www.ecotourism.gr.jp>
- 10) <http://www.ecotourism.org>
- 11) <http://www.ecotourism.org.au>
- 12) <http://www.nacsj.or.jp>
- 13) <http://www.astanet.com>
- 14) <http://www.matta.org.my>
- 15) <http://www.nrw-tourismus.de>
- 16) <http://ecozy.fc2web.com>

参考文献

- 浅野敏久・フンク・カロリン (2002) : シンポジウム「エコツーリズムを考える—自然保護と地域経済の両立をめぐる諸問題」—2001年度秋季学術大会シンポジウム—。地理科学、Vo. 57, No. 3, pp. 155-157.
- 浅野敏久 (2002) : 宮島におけるエコツーリズムの試み。地理科学、Vo. 57, No. 3, pp. 194-207.
- 池田光穂 (2002) : 独断と偏見で往くコスタリカ・エコツアー。科学、Vol. 72, No. 7, p. 745.
- 石森秀三 (2002) : 21世紀は「自律的観光の時代」。科学、Vol. 72, No. 7, pp. 706-710.
- 伊藤修三 (1992a) : エコ・ツーリズムの形態—3つの体験から探る—。琵琶湖研究所所報、No.11, pp. 13-20.
- 伊藤修三 (1992b) : ガラパゴス諸島：苦悩するエコツーリズム先進地。科学、Vol. 72, No. 7, p. 746.
- 井上和衛・中村 攻・山崎光博 (1996) : 『日本型グリーン・ツーリズム』。都市文化社、253p.
- 井上智彦・須田昭久 (2002) : 『世界の環境都市を行く』。岩波書店、243p.
- 今泉みね子 (2002) : ドイツのエコツーリズム。月刊地理、Vol. 47, No.3, pp. 28-34.
- 内村悦三 (1992) : エコ・ツーリズムの現状と課題—コスタリカの事例から—。琵琶湖研究所所報、No.11, pp. 21-28.
- 大野 睦 (2002) : エコツアーガイドの仕事。科学、Vol. 72, No. 7, pp. 714-715.
- 小方昌勝 (2004) : 『国際観光とエコツーリズム』。文理閣、226p.
- 岡本伸之 (2001) : 『観光学入門』。有斐閣、370p.
- 奥田直久 (2002) : 日本の自然公園・世界自然遺産とエコツーリズム。科学、Vol. 72, No. 7, pp. 718-719.
- 小野有五 (2002) : 国際エコツーリズム年と地理学。月刊地理、Vol. 47, No. 3, pp. 8-15.
- 可知直毅 (2002) : 小笠原エコツアーガイド。科学、Vol. 72, No. 7, p. 743.
- 北尾邦伸 (2002) : 地域のなりわいとエコツーリズム。科学、Vol. 72, No. 7, pp. 696-700.
- 小見山 章 (2002) : 白山に残る森の桃源郷を訪ねて。科学、Vol. 72, No. 7, p. 741.
- 小林寛子 (2002a) : 『エコツーリズムってなに？ フレーザー島からはじまった挑戦』。河出書房新社、253p.
- 小林寛子 (2002b) : オーストラリア エコツーリズム事情。月刊地理、Vol. 47, No. 3, pp. 35-41.
- 下村彰男 (2002) : 社会システムとしてのエコツーリズムに向けて。科学、Vol. 72, No. 7, pp. 711-713.
- スー・ピートン著、小林英俊訳 (2002) : 『エコツーリズム教本—先進国オーストラリアに学

- 『ぶ実践ガイド』, 平凡社, 317p. Sue Beeton (1998) : *Eco Tourism: A Practical Guide for Rural Communities*. CSIRO Publishers.
- 鈴木英治 (2002) : 植物を見る目. 科学, Vol. 72, No. 7, pp. 720-724.
- 武田 泉 (1994) : エコツーリズムの概念とその応用—公共交通優先政策との関連を視座に入れて—, 北海道地理, Vol. 68, pp. 29-33.
- 千葉昭彦 (2005) : エコツーリズム考. 季刊地理学, Vol. 57, pp.24-27.
- 中井達郎 (2002a) : 地域にとってのエコツーリズム—小笠原での試みと課題—, 地理科学, Vo. 57, No. 3, pp. 187-193.
- 中井達郎 (2002b) : エコツーリズムガイドライン. 科学, Vol. 72, No. 7, pp. 716-717.
- 仁科尊明 (2003) : エコツーリズム—観光業の発展と場所特性の変化. Vol. 48, No. 12, pp. 30-37.
- 野間直彦 (2002) : 屋久島. 科学, Vol. 72, No. 7, p. 744.
- 速水洋子 (2002) : 見られる側からのエコツーリズム—タイの山地から. 科学, Vol. 72, No. 7, pp. 730-734.
- フンク・カロリン (2002) : エコツーリズムは持続可能か. 地理科学, Vo. 57, No. 3, pp. 158-167.
- フンク・カロリン・浅野敏久 (2002) : エコツーリズムの概念と課題. 月刊地理, Vol. 47, No. 3, pp. 22-27.
- 牧田 肇 (2002a) : 新興の観光対象「世界遺産・白神山地」とエコツーリズムの模索. 地理科学, Vo. 57, No. 3, pp. 176-186.
- 牧田 肇 (2002b) : 白神山地. 科学, Vol. 72, No. 7, p. 742.
- 牧田 肇・竹内健悟・奥村清明 (2002) : 世界遺産「白神山地」の自然保護と利用の問題. 月刊地理, Vol. 47, No. 3, pp. 42-47.
- 松林公蔵 (2002) : エコツーリズムと疾病・老化. 科学, Vol. 72, No. 7, pp. 735-740.
- 安間繁樹 (2002) : 動物世界へ入る—キナバル山での動物観察. 科学, Vol. 72, No. 7, pp. 725-729.
- 山田 勇 (2002) : エコツーリズムと生態資源. 科学, Vol. 72, No. 7, pp. 690-695.
- 山下晋司 (2002) : エコツーリズムの政治経済学—マレーシア・サバ州のケースから. 科学, Vol. 72, No. 7, pp. 701-705.
- 山崎光博 (2004) : 『グリーン・ツーリズムの現状と課題』, 筑波書房, 56p.
- 幸丸政明 (1992) : 釧路湿原におけるエコ・ツーリズムの可能性. 琵琶湖研究所所報, No. 11, pp. 29-38.
- 横山秀司 (2002) : ヨーロッパにおけるグリーン・ツーリズムとエコツーリズム. 地理科学, Vo. 57, No. 3, pp. 168-175.
- 吉田春生 (2003) : 『エコツーリズムとマス・ツーリズム—現代観光の実像と課題』, 大明堂, 261p.
- 脇田武光・石原照敏 (1996) : 『観光開発と地域振興—グリーン・ツーリズム解説と事例』, 古今書院, 165p.
- 渡辺悌二 (2002) : 国際エコツーリズム年と国際山岳年. 月刊地理, Vol. 47, No.3, pp. 16-21.
- Boo, Elizabeth (1991) : “Planning for Ecotourism”. PARKS, 薄木三生仮訳「エコ・ツーリズム計画」, 国立公園, No. 501, pp. 2-7.